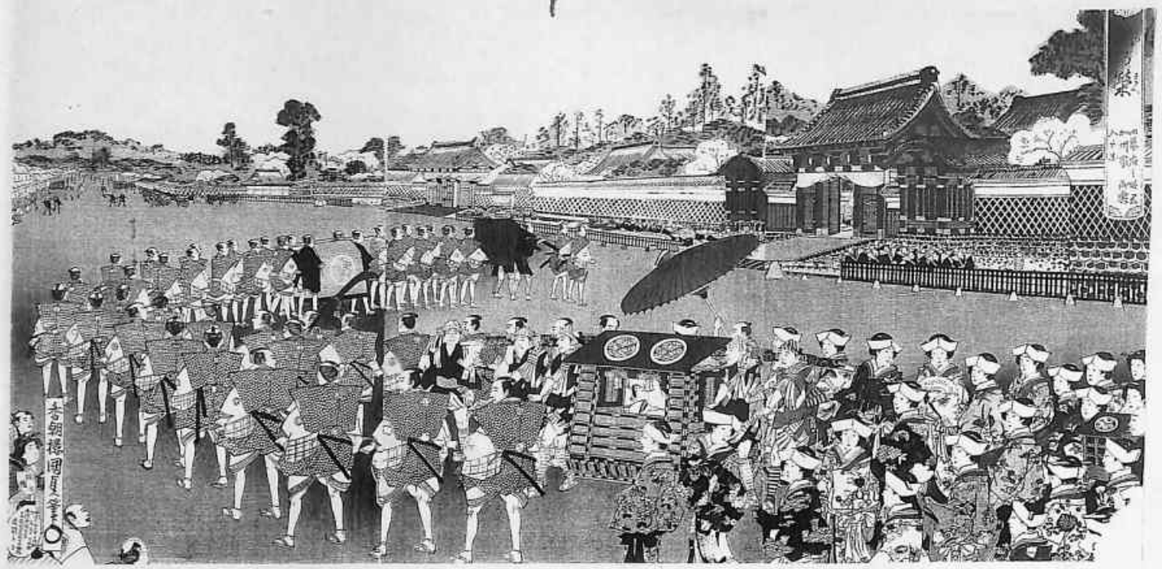
1



利家像
青年時代の利家の肖像。肩衣に袴という正装で端座する姿に描かれている。面長で端正な表情からは「槍の又左」と呼ばれ、織田家中でも恐れられた猛者を想像できない。（石川県七尾市長齢寺蔵　七尾美術館）

松の栄
（旧幕府の姫君加州へ御輿入の図）

文政10年（1827）に徳川第11代将軍家斉の第21女溶姫が加賀藩第13代藩主前田斉泰に輿入れしたときの様子を描いた錦絵。赤門はこのとき溶姫を迎えるため建立されたものとして名高い。白無垢の花嫁衣装に身を包んだ溶姫が、豪奢な行列を従えて赤門をくぐる図は、当時の華やかさを今に伝えている。

2

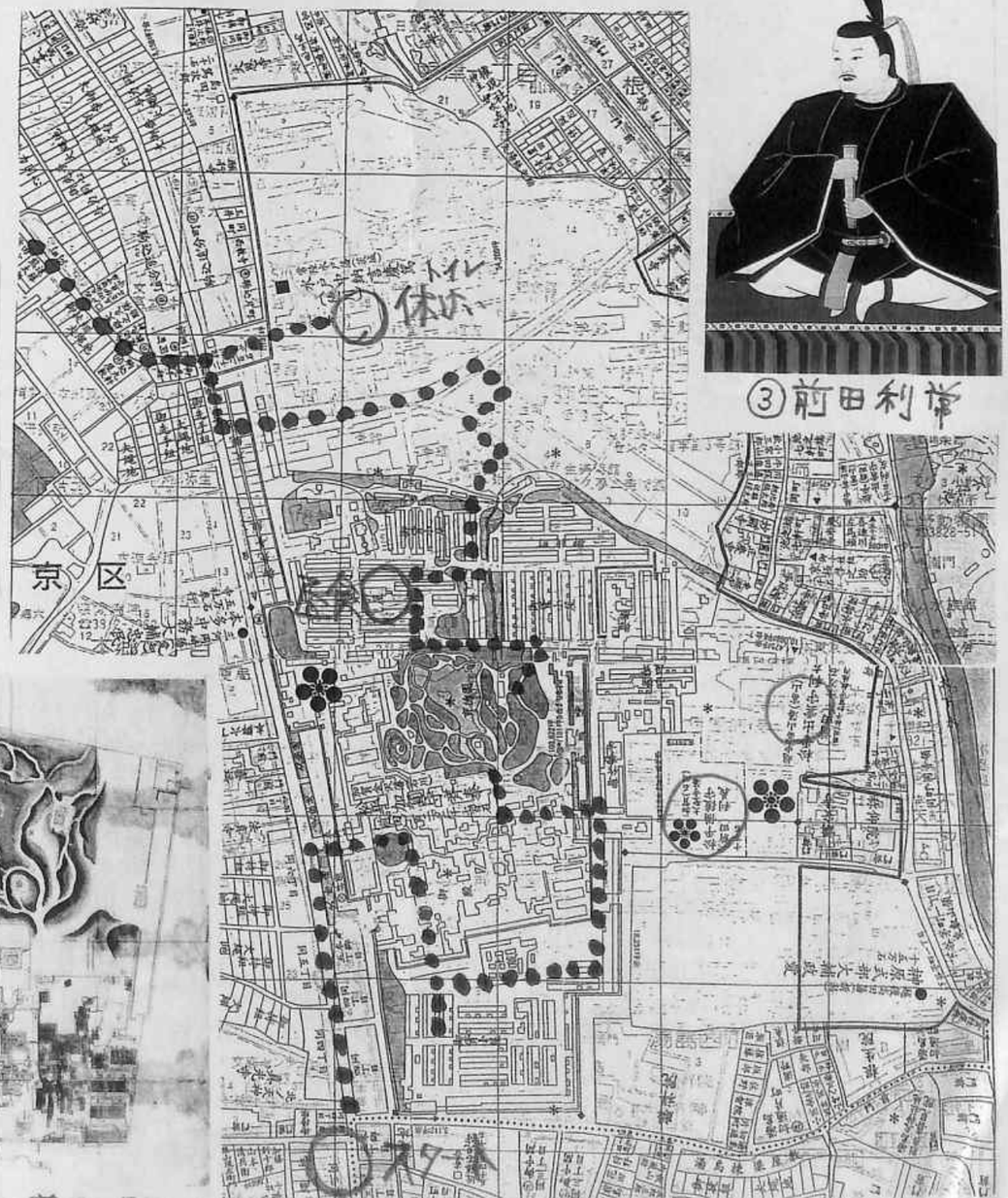
前田家

前田氏は、美濃国安八郡前田村の土豪出身で、藩祖利家の父利春（利昌）のこう、尾張海東郡荒子に住し、二〇〇〇貫を領していた。利家は利春の四男に生まれ、織田信長に仕えて軍功をたて、永禄一二年（一五六九）に家督を継ぎ、北陸の信長勢力の最前線として越前府中を領した。天正九年（一五八一）には能登四郡を与えられ、七尾を居城とした。その後は秀吉麾下の大名として勢力をのばし、金沢に移る。二代利長は父利家同様、五大老に列せられ、関ガ原の戦いには東軍に属し、加賀・越前・能登三国一二〇万石余の大大名となった。三代利常は、嫡男光高に家督を譲るにあたり、次男利次に越中富山一〇万石、三男利治に加賀大聖寺七万石をそれぞれ分封し、支藩とし、宗藩は一〇二万石を領し、明治に至っている。幕末維新には、一〇〇万石の大藩にもかかわらず、時勢に乗れず、新政府の主流となれなかった。

●城を歩く会　9月定例会　平成２０－９－１７（水曜日）　　山岸弘明

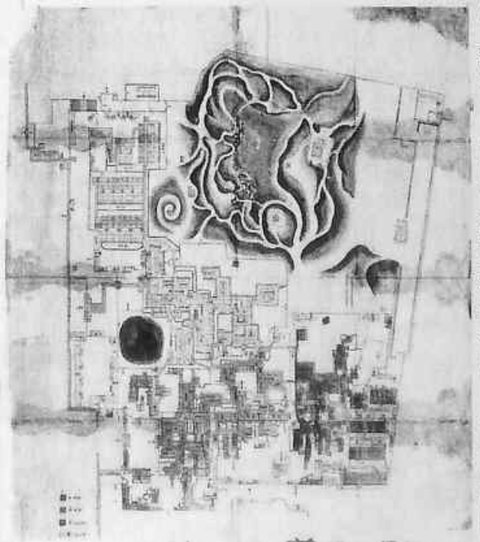
本郷に江戸を訪ねる②　東京大学「加賀藩上屋敷」を歩く

①「御主殿」は将軍の娘が従三位以上に輿入れした時に作られる専用御殿で、その門を「御主殿門」という。
②「東大赤門」は加賀前田13代藩主斉泰が徳川将軍家11代家斉の娘「溶姫」を迎えた時の「御主殿門」、慶事を表す朱色に着色、正門の「黒門」に対して「赤門」と言った。国の重要文化財。
③前田斉泰（なりやす）＝江戸後期、加賀藩100万石13代藩主。当時藩財政は窮乏「天保の改革」を進めるが成功しない。藩内は尊皇、佐幕派が対立した。慶応２年隠居、明治17年没、74才。
④溶姫＝文化７年（1810）家斉21女に生まれる。実母はお美代、文政10年18才の時輿入れ、嫡男ほか２男、明治元年没、56才。
⑤「子福将軍」家斉の子女は54人、うち半分が成人したので幕府はムコ、ヨメの押しつけ先に頭を悩ました。
⑥将軍の娘は生涯将軍家族待遇、とくに登城もした。大奥女中多数がしたがい、主人の権威笠に藩主を見下し呼び捨てにした。
⑦薬医門形式＝屋根切り妻造り本瓦葺き、薬医門形式３間１戸大御門、袖塀、唐破風造り本瓦葺きの両番所付き。関東大震災、昭和戦災をまぬかれ、現在地は15m前進、移築されている。
⑧焼けたら再建は許されず、門警備のため「加賀蔦」が誕生した。
⑨棟瓦は将軍家「三つ葉葵紋」、軒瓦は前田家の「梅鉢紋」、大棟鬼瓦の「学」は東大を表わす。



優雅な「御主殿門」はいま東大のシンボル ―― 11代将軍の娘「溶姫」の輿入れ

赤門↑
門番所



2） **東大の迎賓館 —— 旧前田侯爵邸懐徳館庭園**

① 明治維新の藩主慶寧は鳥羽伏見の戦いで慶喜応援のため出兵するが間にあわず、以後、新政府軍に加わって東北諸藩鎮圧に活躍した。廃藩置県後東京へ出て、旧上屋敷の一部に居住した。

② 明治22年利嗣のとき侯爵、43年明治天皇行幸に備え和館、洋館を新築、大正15年東京大学に譲って300年間に及んだゆかり地を去った。

(1)昭和20年戦災で建造物の大半を焼失したが庭園は当時のまま。昭和26年和館を復元、現在は東大の迎賓館になっている。側面と正面から本館と庭園を遠望。立ち入りはできない。

3） **江戸時代はなかった竜岡門 —— 東大病院の大聖寺藩、富山藩邸跡地を遠望**

① 竜岡門＝現在は東大医学部、東大付属病院の正門、バス通り。

(1)江戸時代は門はなくやや離れた東側に小さな通用門があった

② 東大付属病院周辺から旧支藩邸跡を遠望

(1)奥が支藩富山前田藩＝3代利常の2男利次が10万石を分知して立藩、明治維新へ。

(2)手前は大聖寺藩邸跡＝利常の3男利治が寛永16年7万石、のち高直しで10万石に。

(3)加賀藩の支藩はほかに初代利家の4男利隆からはじまる七日市1万石がある。

③ 大聖寺藩邸跡碑

4） **利家の妻まつの人質に始まる加賀藩邸の変遷 —— 山上会館前ナゾの石垣と切り損じ石材周辺で**

● ① 前田加賀藩邸の変遷

(1)慶長5年（1600）前田利長は関が原の合戦に先立って母まつを徳川家康の人質に差し出し、辰の口屋敷を拝領。いまの大手町1ファーストスクェアーの一画、明暦3年まで

(2)元和2（1616）、3年ころ本郷下屋敷（のちの上屋敷）拝領

(3)明暦3年（1657）～天和3年＝筋違橋外上屋敷9,009坪を上屋敷とする

(4)天和3年（1683）～明治維新＝本郷下屋敷106,953坪を上屋敷とする。

(5)明治維新（1868）当時の藩邸＝上屋敷前出＝(4)参照

駒込中屋敷（明暦3年～明治維新）20,660坪

下板橋下屋敷（延宝7年～明治維新）217,935坪＝平成18年度ご案内ずみ

深川黒江町蔵屋敷（明暦3年～明治維新）2,668坪

② 江戸後期加賀藩上屋敷図＝

(1)正門（黒門＝櫓門）と御主殿門（赤門）2つの正門。きょうのコースと現在地確認

(2)御殿部分＝藩主御殿、御主殿、庭園、さざえ山。塀で区切る。

(3)御貸し小屋＝藩士部分、上級士分と下級士分、江戸詰め1,000人と参勤3,000人。下屋敷に分散。

③ 参勤交代の絵図＝

(1)加賀金沢出発、中仙道、北国街道または東海道経由、12～15日

江戸入り前日、板橋宿下屋敷着、行列を整えて日本橋、本郷加賀屋敷へ

(2)供揃え2,000人～3,500人、日本最大の大名行列、経費およそ1万両（数億円）藩財政を圧迫した。

④ 山上（さんじょう）会館建設時の発掘調査で出てきたナゾの石垣

(1)解説板＝巾15m、高さ3段、当時はもっと高かった？ 瓦屋根の建物跡

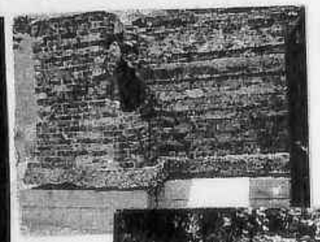
(2)刻印？＝「天下普請」以外にはないとされるが

⑤ 石材の加工ミス？＝巨石を運んで江戸で加工した？

(1)石材の加工＝石目を読む、矢穴をあける、矢穴にくさびを打ち込む

矢穴ははじめのころ大きく少ない→後期は小さく多い

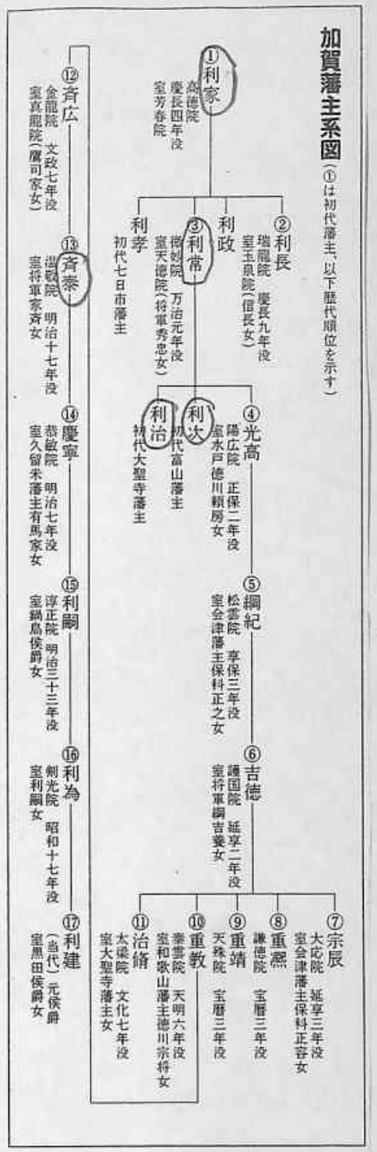
懐徳館

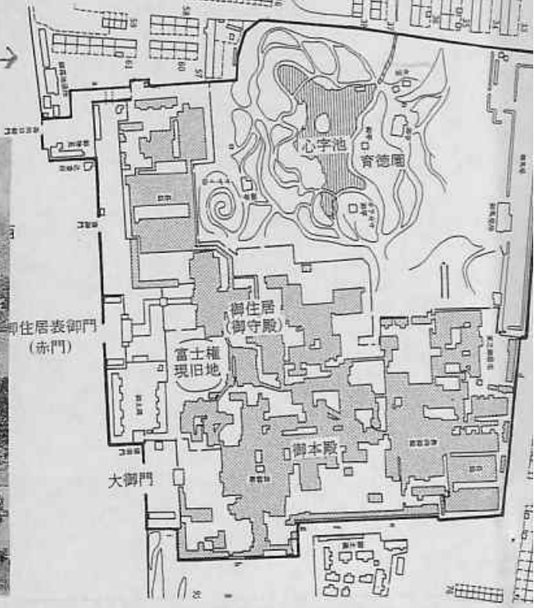


東大病院

大聖寺藩邸

洋館跡





5） **家光の御成りに作られた「回遊式庭園」 —— 「育徳園心字池」を3分の2周**

① 前田家上屋敷庭園＝「育徳園」がほぼ当時のまま現存。旧態をよく残すが管理はいまいち。

② 寛永3年（1626）3代利常の時、3代将軍家光の御成りのために作られた池泉回遊式庭園。利常は外様大名として誠意を示すべく国元から職人や人夫を招集、工期3年間をかけた。

(1)「8景8境の勝（解明されていない）、築山小亭を設け数寄を究めた」とする

(2)庭園の中心は「さざえ山」と「心字池」、池泉の水源は自然の湧き水

③ 明治41年夏目漱石の名作「三四郎」の舞台に。主人公小川三四郎と里見みね子の出会いの場とされる。

(1)以降「三四郎池」が通称に

④ 築山「さざえ山」＝さざえのように迂回しながら登った築山。庭園全景を俯瞰した。国元「兼六園」の写（移）し、築土は池泉の上げ土使用という。いま教育学部で当時の面影はない。

⑤ からかさ御亭（ちん）跡＝御亭建築は庭園に作られた風雅な2階建て、眺望の楼閣をいうが、御亭だと「あずまや」の総称。からかさ形の瀟洒なかや葺き？心字池を見下ろす 景勝地に記念碑も

⑥ 心字池＝庭園の中心となる池泉。いまは汚れているが当時澄み渡る池にコイなど鑑賞用の魚を泳がせ舟遊びに興じたことだろう。

(1)「心字池」は草書の「心字」にかたどっ池。字になっていなくてもよい

⑦ 池泉をめぐる「回遊式」コースは起伏が激しく野趣に富んでいる。

(1)現存する江戸大名庭園の多くは歩きやすく改変されたが、ここでは江戸初期の姿そのまま

(2)天候や時間、位置、角度で異なる景観を楽しみながら加賀の殿様気分で回る
(3)稜線、汀線や護岸の変化に注目。地形を巧みに利用した回遊路の踏み石は玉石、切り石などてんでバラバラ、本来は使いわけてあったものだろう。

⑧　小さめの中島が池泉を引き締める。どんないわれか、残念ながら伝わっていない。
(1)中島に渡る橋はない。舟で上ったものだろうか
(2)コース最後の平石は「舟着き場」だろう

⑨　滝や磯わたり、砂浜？、藤棚、橋など。名勝、名景の写しか、研究解明で解説表示を期待

⑩　「心字池碑」「史跡表示板」＝「心字池」の歴史、「三四郎池」などに触れる。

6）　安田講堂前広場で昼食、学食もどうぞ ―― 集合時間は　　時　　分です

①　持参弁当を広げる

②　弁当ない方、広場のま下が「東大学食」、大辛の「赤門ラーメン」がおすすめ。
　回りにコンビニや購買部（売店）もあります。

③　昼食休憩にポプラ並木道で「マンホール蓋」デザインめぐりはいかが。
　「帝国大学」「東京帝国大学」「東大」の３種、学校名の変遷を刻んでいる。

ここで保科講師、大森会長にバトンタッチ。ショートリリーフで「本郷追分」を担当します

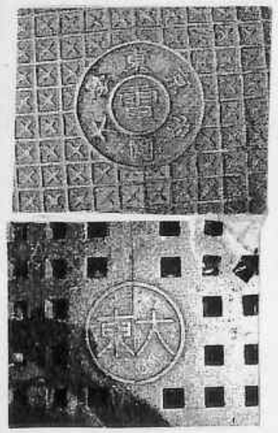
7）　中仙道と岩槻街道の分岐点 ―― 「本郷追分」と「追分一里塚」跡

①　旧中仙道（本郷通り）と岩槻街道の分岐点「追分」。日本橋スタート、最初の「一里塚」があった。
(1)追分＝道が分かれること、分岐点をいう
(2)一里塚＝１里ごとに設けられた塚で、目印に榎の大木が植えられることが多かった。

②　本郷追分の角店（かどみせ）は老舗２店舗
(1)高崎屋＝宝暦連関創業の酒屋で両替商を兼ねたという。現在の建物は明治７年建築
(2)朝田屋＝江戸後期創業の和菓子屋
(3)周辺に昔からの老舗も多い

③　「追分一里塚跡」文京区の指定史跡看板

④　岩槻街道をゴールの都営三田線「白山駅」めざしてすすむ



マンホール蓋

本郷追分↓　一里塚跡↑

東大安田講堂

昼食タイム→

地下を探索する――とはいっても某TV番組の埋蔵金発掘のような話ではない。現在我々がキャンパスとして使用している地面の下の話である。唐突に地下の探索をはじめると、酸素不足になりそうなので、まずはウォーミングアップから。

東大キャンパス、とりわけ本郷キャンパス内には、現在も使用している赤門や三四郎池をはじめ随所に地下散策への「手がかり」が残されている。というのも本郷キャンパスエリアが、概ね前田家の藩邸エリアを踏襲したものだからである。

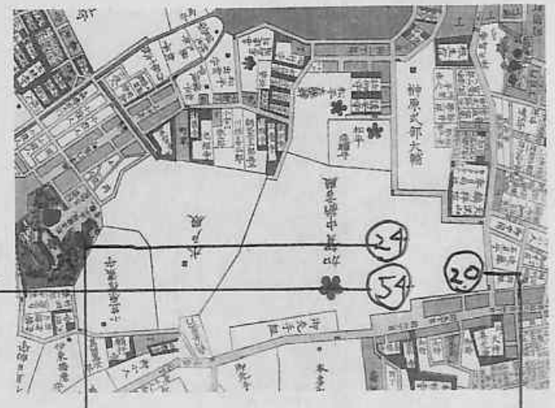
例えば赤門や三四郎池などは、加賀藩前田家の大名屋敷内に造られていたものであり、赤門は徳川家十二代将軍家斉の息女溶姫が加賀藩十三代藩主斉泰に輿入れした際に造られた門であり（但し位置は移動している）、三四郎池を中心とする森の辺りは、藩邸内にあった育徳園という心字池を中心とする加賀藩庭園の跡を残しているものである。

加賀藩邸の他にも、東大病院地区は加賀藩の支藩である富山藩や大聖寺藩、弥生地区は水戸藩や安志藩の江戸藩邸が存在していたことが絵図面などから知られている（下図）。しかし時代の移り変わりの中で開発が進み、様々な建物が建築されてきたキャンパスの地下に、藩邸であった頃の痕跡が数多く残されていようとは誰もが夢にも思わなかった事であった。

ところがである。一九八三年の創立百年記念事業の一環として計画された「山上会館」「御殿下記念館」の建設に先だって行った発掘調査によって、絵図面に描かれていた通りの姿で加賀藩邸であったころの痕跡が見つかったのである。これがその後マスコミを賑わした、いわゆる「梅之御殿」（加賀藩十代藩主重教夫人のために建てられた隠居屋敷）の発見である。また、これと前後して建築された「法学部三号館」「文学部四号館」「医学部附属病院中央診療棟」「理学部七号館」の各地点においても、江戸時代の藩邸生活が偲ばれるような痕跡が見つかり、その成果はすでに報告書で発表している通りである。

調査報告が出されている地点以外にも埋蔵文化財調査室では、二〇〇三年現在までに本郷キャンパスを中心として六〇数地点の発掘調査を実施しているが、日頃は工事場の中で調査を行っているために一般の方々に知られる機会がほとんどない。ましてや散策していただくことなど無理な話となっている。そこで今回は本誌面を拝借して、最近実施した調査を中心に成果の一部を江戸時代以降と以前という形で二回にわたって窒息しない程度に紹介してみたい。

江戸時代以降（その一）



遺跡地図20
総合研究資料館地点（現・総合研究博物館）

総合研究資料館地点からは一九〇七（明治四〇）年に前田侯爵が明治天皇行幸のために建築された懐徳館西洋館の建物基礎が見つかっている（写真1。現在の懐徳館は大学の迎賓館として、一九五一（昭和二六）年になって新たに建築された木造建築である）。調査区内に懐徳館が位置することが絵図面などにより確認されていたが、発掘調査したところ、煉瓦積みの基礎及び地階の玄関、便所に当たる部分が予想以上に良く残っていた。現在これら建物の一部は、総合研究博物館アプローチに野外展示され見て頂けるようになっている。

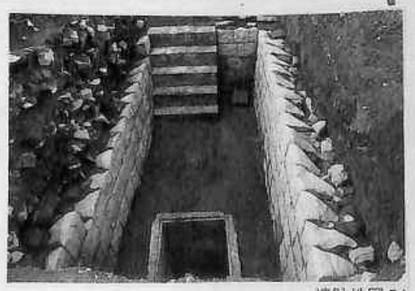
遺跡地図24
医学部教育研究棟地点（現・医学部教育研究棟）

発掘調査は四回に分けて行われ、二〇〇二年十二月に最終調査が終了したばかりの地点である。ここは加賀藩藩主やその家族などが居住する、いわゆる御殿のエリアであることが絵図面などから知られていた。発掘調査したところ、江戸時代前期から近代までの各生活面が極めて良く残っており、地下室、井戸、屋敷境、御門跡、礎石、能舞台（写真2）、便所跡などの様々な生活の痕跡を見つけることができた。なお、この写真2のような能舞台の下部施設と考えられるものは、これまでに滋賀県彦根城表御殿遺跡、東京都尾張藩上屋敷跡遺跡の二箇所で見つかっており、いずれも基本的な構造は一致している。また現存最古とされる西本願寺能舞台の舞台構造もほぼ同様のものであることがわかっている。

遺跡地図54
総合研究棟（文・経・教・社研）地点（現・経済学研究科棟）

ここは加賀藩十三代藩主斉泰夫人（溶姫）の御殿、中でも膳所周辺に該当する場所であることが絵図面などから知られていた。発掘調査の結果、石組みの地下室（写真3）をはじめとする様々な生活の痕跡が見つかっている。石組みの地下室からは、大量の焼けた瓦や焼土などと一緒に、碗の高台内に墨で「御膳所」と書かれたもの（下写真↓）などが見つかり、ここが絵図面に描かれていた通り膳所附近であった可能性を裏付ける証拠となった。なおこの地下室は、出土したモノの年代観から一八六八（明治元）年の加賀藩本郷邸の火災時に廃棄されたものと考えられる。

以下省略



遺跡地図54
写真3
経済学部地点検出　御守殿の地下室

遺跡地図24
写真2
医学部研究棟地点検出　能舞台

遺跡地図
総合研究資料館地点検出　前田侯爵邸（旧懐徳館西洋館

東大キャンパス地下めぐり

東大「淡青」第8号（2003-01）から